

顕在的・潜在的自尊心がいじめに及ぼす影響

川西千弘
土居淳子

問題

教育現場でいじめが深刻な問題となって久しいが、ネットいじめなどさらにその様相は多様化・複雑化している。実際、これらの変化を受けて文部科学省は平成25年度からいじめ防止対策推進法の施行に伴い、いじめの定義を「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」としている。また、文部科学省平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査等結果の訂正についてによると平成26年度のいじめ認知件数は188,057件（小学校122,721件、中学校52,969件、高等学校11,404件）で、いじめを認識した学校数は21,641校で全学校数に占める割合は56.5%にのぼる。また、いじめの現在の状況で解消しているものの件数の割合は88.7%であるが、いじめ防止対策推進法第28条第1項に規定する重大事態の発生件数は450件に上り、前年度の179件を大きく上回る結果となった。

このような現状の把握と改善を図るために、心理学分野でも様々な研究がすすめられている。例えば、いじめの特徴（下田, 2014）、いじめ経験に拠るその後の影響（坂西, 1995；三島2008）、いじめに対する教師の知見や態度（大西・黒川・吉田, 2009）、いじめに関わる集団規範や特性（大西・吉田, 2010；鈴木・田口・田口, 1995）およびいじめ停止や予防などの対処方略（勝間・津田・山崎, 2011）、などである。その中でも、いじめ問題解決に大いに寄与する研究として、いじめ加害者および被害者の特性に関するものが上げられる。本間（2003）は、中学生を対象に加害者の特徴として学校生活での友人関係は良好だが、学校生活での規則を遵守しようとする態度に欠け、対人面

での攻撃性が強く、その一方でいじめ被害や被害者への道徳・共感的な認知や感情が低いことをみいだした。また、石田・中村（2013）は、加害経験の多い中学生は大人に対する信頼感が低く反優等生願望が強いこと、一方被害経験の多い中学生は友だちからの承認欲求が強いことを明らかにし、友だちとのつながりを維持したいがために多少のいじめがあってもその関係を断ち切れないというアンビバレントな状態にあると考察している。

このよう中で、近年多くの研究者が注目しているのがいじめと自尊心（自尊感情と記載する引用文献もあるが、本論文では統一的に自尊心を用いる）の関連性である。例えば、いじめ被害者は自尊心が低く（Cammack-Barry, 2005）、従来型いじめであろうとネットいじめであろうとその被害者は特に学業・学校に関する自尊心が低い（Guarini, Passini, Melotti & Brighi, 2012）ことが報告されている（ただし、後者の研究では自己肯定感を示す全体自尊心とは無相関）。また、吉川・今野・会沢（2012）は、大学生を対象に遡及的調査を行い、いじめ被害経験者は被害経験が無いものに比べて自尊心が低く、特にいじめ被害程度が激しかった者の自尊心が低いことを示し、いじめられ経験が自尊心の低下を招くことの傍証を得ている。さらに同研究では、いじめ・いじめられ両方経験者はいずれの経験もない者に比べて自尊心が低かったが、いじめ加害経験者については特に顕著な結果は得られていない。しかし、前述した本間（2003）では、いじめ加害経験のみもつ者は最も自尊心が高く、特にいじめ加害経験のみを持ちかついじめを継続しているものは自尊心が高かったが、逆に加害・被害両方経験者は吉川ら（2012）同様自尊心が低かった。一方、大久保（2011）はいじめ被害やいじめ加害経験と自尊心とは無関係であることを報告している。以上のことから、いじめと自尊心の関係については多くの検討がなされているが、その結果は一様ではなく結論には至っていない。その背景として自尊心のとらえ方の問題があると考え

られた。

そもそも Rosenbergs (1965) によると自尊心 (感情) とは「自分を受容かつ尊重し、自己の価値を評価すること」であり、彼はその自己肯定の程度を測るセルフ・リポート式の 10 項目からなる尺度を構成した。これに拠り測定される意識的な顕在的自尊心では、自尊心が高いほど適応的であり、自尊心の高い人は社会的スキルが高く、社会的に望ましい行動をとりやすい (Batson, Bolen, Cross & Neuringer-Benefiel 1986) が、自尊心が低い人は人生に対する不満足 (Crocker & Wolfe, 2001) や孤独感 (Cutrona, 1982) が高いことが報告されている。ところが、Baumeister, Smart & Boden (1996) は、自尊心の高い人が他者から否定的な評価を受けると自己評価との食い違いから脅威を感じ、自らの自己評価を防衛するためにその他者に対して否定的感情を抱きその他者に対して攻撃性を向けることを報告しており、必ずしも自尊心が高いことが個人内および対人的側面においてポジティブに機能するものではないことを指摘した。このような顕在的自尊心と適応の関連性の矛盾を解くカギとして、最近注目されているのが潜在的自尊心である。潜在的自尊心とは「自分に関する対象への反応を導く非意識的な自己に対する評価」 (Greenwald & Banaji, 1995) であり、意図的に質問に答えさせる顕在的自尊心とは異なり、IAT など無自覚な場面で回答への反応時間などを測ることで自分に対する肯定的な潜在的態度を測定する。Banaji & Greenwald (2013) (北村・小林 訳 2016) は、この非意識的のバイアスをブラインド・スポットと呼び、これが本人も気づかないうちにその人の行動に影響を与えることを指摘している。

つまり、意識的な顕在的自尊心にこの非意識的な潜在的自尊心を組み合わせることに拠り、Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne & Correll (2003) は、自尊心と適応の矛盾を以下のように実証し説明している。彼らによると、顕在的・潜在的両自尊心が共に高い群に比べ顕在的自尊心は高いが潜在的自尊心が低い群はより自己愛が強く、かつ内集団ひいきという形で自己高揚を行ったり、認知的不協和の低減により自分の決定の合理化を図るなど、より防衛的行動をとることが示された。これらのことから、顕在的・潜在的自尊心が共に高いつまり両者が一致した場合は「安定した高い自尊心」となるが、顕在的自尊心が高くて

も潜在的自尊心が低いつまり両者が不一致な場合は、脅威に対して脆弱な自尊心の高さを守るために防衛的行動をとりうる「防衛的高自尊心」となると述べている。ただし、本邦では内集団ひいきについては原島・小口 (2007) が Jordan ら (2003) の追認を行っているが、自己愛傾向については藤井・澤海・相川 (2014) では異なった結果がえられており、理論の妥当性について引き続き検討が行われている。また、顕在的自尊心と潜在的自尊心の組み合わせにより異なる特性も指摘されている。例えば、小塩・西野・速水 (2009) では、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される (速水・木野・高木, 2004) 仮想的有能感との関係を検討し、仮想的有能感の部分的・間接的指標である「他者軽視傾向」は低いながらも潜在的自尊心と正の相関を持ち、かつ顕在的自尊心は低いものの潜在的自尊心が高い者は最も他者軽視傾向が強いことを明らかにしている。

そこで、本研究では顕在的自尊心と潜在的自尊心を同時に扱い、これといじめの関連性を検討することにした。他者をいじめることは自分の立場を安定させると同時に、被害者を見下し、自分が優位であることを認識できる機会となりうる (松本・山本・速水, 2009)。そのため、前述したいじめ加害経験者で顕在的自尊心が高いという報告は、かれらの潜在的自尊心は案外低く脆弱な自尊心のポジティブさを維持継続するために、いじめという行為を通じて自らの自尊心を防衛しているのかもしれない。また、いじめ加害・被害両経験群で顕在的自尊心が低いのは、いじめ被害を受けたことで脆弱な顕在的自尊心が低下したものの、潜在的自尊心は案外高く、たまったストレス発散のためにかれらの特徴である他者軽視からいじめを行っているのかもしれない。なお、本研究では上述したいじめ経験やその影響のみならず、いじめに対する認知への顕在的・潜在的自尊心の影響についても検討する。なぜなら、共感性 (大西・吉田, 2010) や役割取得 (蔵永・片山・樋口・深田, 2008) など、いじめ加害者・被害者をどのように認識するのかで、その対応が異なることが指摘されており、いじめやその該当者を如何に認知するかには、自尊心の個人差が重要な影響をもつと思われるからである。

方 法

参加者

女子大学生 71 人を対象とした。ただし、本研究はいじめを扱うため日本の修学状況や経過年数などが反映すると考えられるため、留学生、社会人入学者および社会人編入生は参加者に含めなかった。

調査内容

1. いじめ質問紙の構成 以下の3つの尺度を構成し、実施した。

(1) いじめ場面想定法

いじめをどのように認知するかを確認するために、場面想定法を実施した。参加者全員に、資料1の場면을紙面提示し、A子(いじめ加害者想定)とB子(いじめ被害者想定)それぞれについて①A子の印象(「反抗的だ」「冷酷だ」などの15項目)、②A子への感情(「疲れた」「むなしい」などの15項目)③B子の印象(項目はA子と同様の15項目、ただし提示順序は異なる)および④B子への感情(項目はA子と同様の15項目、ただし提示順序は異なる)について、いずれも非常にあてはまる7～全くあてはまらない1の7件法で回答を求めた。評定は、①印象②感情共に、ネガティブなほど高得点になるように数値化した。なお、印象・感情ともに評定項目は、参加者間でカウンターバランスした。

(2) いじめ経験

以下の3つの質問に対し、(はい・いいえ)のいずれかを選択させた。①これまでに人をいじめた経験がありますか?②これまでに人からいじめられた経験がありますか?③これまでにいじめの現場(人がいじめたり、いじめられたりしている場面)を見たことがありますか?

(3) いじめ影響尺度

参加者負担を考慮して、香取(1999)のいじめ影響尺度の下位尺度である「情緒不適応」「他者尊重」「同調傾向」「他者評価への過敏」「精神的強さ」から因子負荷量の高い3項目ずつを抜粋し、15項目でいじめ影響を測定する尺度とした。なお、香取(1999)では「進路選択への影響」という下位尺度も含まれているが、本調査は大学生を対象とするため、この下位尺度からは項目抽出を行わなかった。項目をランダムイ

して提示し、「非常にあてはまる7～全くあてはまらない1」の7件法で回答を求めた。なお、得点が高くなるほどいじめ影響が重篤であるように数値化し以下の分析に用いた。

2. 自尊心の測定

(1) 顕在的自尊心の測定 ～自尊心尺度～

顕在的自尊心を測定するために、内田・上埜(2010)が検討した Rosenberg 自尊感情尺度(Mimura & Griffiths, 2007の日本版 RSES)を用いた。全10項目に対して、「強くそう思う4・そう思う3・まあまあそう思う2・少しそう思う1」で回答を求め、得点が高くなるほど顕在的自尊心が高くなるように数値化し以下の分析に用いた。

(2) 潜在的自尊心の測定 ～自尊心 IAT～

潜在的自尊心を測定するために、自尊心 IAT を実施した。これは、Greenwald, Nosek & Banaji. (2003)に準じ7ブロックから構成し、対象概念は「自分」「他者」、属性概念は「快い」「不快」とした。小塩ら(2009)に準じ自尊心 IAT に用いた刺激語などを Table1 に示した。

実験参加者には、コンピュータ画面中央に1つずつ表示される刺激語を、右ないし左のカテゴリーへと出来るだけ早く分類するように指示した。画面上部の左右には分類すべきカテゴリーを提示し、第1ブロックは20試行で左カテゴリーに「自分」右カテゴリーに「他者」が表示され、前出した対象概念に関する刺激語の分類を行った。第2ブロックも20試行で左に「快い」右に「不快」が提示され、前述した属性概念に関する刺激語の分類課題であった。第3ブロックは20からなる練習試行で、左に「自分」と「快い」、右に「他者」と「不快」を対提示し、第1及び第2ブロックで用いた刺激語を混ぜて順次提示し、右または左のカテゴリーに分類させた。第4ブロックは40からなる本試行で、第3ブロックと同様のデザインであった。第5ブロックは40試行で第1ブロックと同様のデザインであるが、画面左カテゴリーに「他者」右カテゴリーに「自分」というようにカテゴリー表示を逆転させた。続く第6ブロックは20からなる練習試行であるが、左に「他者」と「快い」、右に「自分」と「不快」というように第3ブロックのカテゴリー提示を逆転させた。最終の第7ブロックは40からなる本試行で、第

6ブロックと同様のデザインであった。

本調査では、自尊心 IAT と前述する質問紙のデータを接合するために、参加者に前もって用意した5桁の数字を記入させた。自尊心 IAT のカウンターバランスをとるために、その数値が偶数の参加者には上述した順番で、奇数の参加者には第1、第2ブロックの後、第6、第7、第5、第3、第4の順で IAT を実施した。なお、参加者が分類を押し間違えた際は画面中央に×を表示した。刺激語の提示間隔は400msで、刺激語の提示からキーを押すまでの時間を反応時間として測定した。これらの操作には、Millisecond software 社の Inquisit 3.0を用いた。測定した IAT データは、Greenwald et al., (2003) に準じて D スコアを算出した（誤答の場合は反応時間に600msのペナルティを課した）。なお、D スコアが高いほど「自分」と「快い」の潜在的連合が強く、潜在的自尊心が高いことを示していた。

調査時期と手続き

2015年に便宜的抽出法により参加希望者を抽出した。調査は、自尊心 IAT、自尊心尺度、いじめ質問紙の順で、いずれも個別に無記名で調査を実施した。なお、上記3調査のデータ接合のために、実験者が用意した5桁の番号を参加者にランダムに渡し、必要箇所にその番号を記載させた。

倫理配慮

調査の際、事前説明として「研究目的」「プライバシーの保護」「参加を撤回、途中で辞退するおよび回答を拒否する権利があること」「研究結果公表時の個人情報保護」「データの管理責任を研究者が負うこと」などを文章と口頭で通知し、同意を得たもののみを参加者とした。ただし、事前説明を具体的にしすぎるとは、調査目的の露見や反応歪曲を招くため、詳細は事後説明（ディブリーフィング）にて行い、最後に同意

書に署名を頂いた。なお、調査の実施に当たり、京大光華女子大学研究倫理委員会に詳細な研究目的と方法を提出して審査を受け、調査の妥当性を担保した。

結果

1. 尺度構成

(1) **自尊心尺度の構成** 自尊心尺度の内的一貫性を確認するために α 係数を算出したところ、全10項目の α 係数は0.834で、十分な値が示された。そのため、この10項目で尺度を構成し、平均値（標準偏差）を算出して以下の分析に用いた。

(2) **いじめ影響尺度** 15項目について主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。その結果、因子の減衰状況（4.03, 2.54, 1.74, 1.14, 1.12）と解釈可能性の観点から3因子解が妥当であると判断し（累積寄与率55.44%）、因子毎に因子負荷量0.495以上のものを抽出した。その結果、第1因子は“人と違ったことはしないでおこうと思うようになった”“嫌われないように人につかうようになった”など6項目で、他者への過剰な配慮や同調により波風を立たせないようにする姿勢を表し、香取（1999）の「同調傾向」と「他者評価への過敏」が融合したものであったので「他者過敏」因子と命名した。第2因子は“人間的に成長した”“相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった”など5項目で、人間的な成長や対人関係スキルの向上を表し、香取（1999）の「他者尊重」と「精神的強さ」が融合したものであったので「成長」因子と命名した。第3因子は“体に不調を感じるようになった”“よく眠れなくなった”の2項目で、いじめ経験によって体調が悪化したことを表し、香取（1999）の「情緒的不適応」の2項目に該当したものであったのでそれに準じて「情緒的不適応」因子と命名した。各因子の平均と標準偏差を算出して以下の分析に用いた

Table1. 自尊心 IAT で用いた刺激語

カテゴリー	刺激
自己	自分、自身、私、我々、わたし
他者	友人、知人、他人、知り合い、ともだち
快い	うれしい、幸せな、気持ちいい、元気、素晴らしい
不快な	汚い、残忍な、気持ち悪い、苦痛、落ち込む

2. 顕在的自尊心と潜在的自尊心の関連性

自尊心尺度の平均値と自尊心 IAT の D スコアについてピアソンの相関係数を算出したところ、有意ではなかった ($r=-.146, n.s.$)。

そこで、自尊心尺度および自尊心 IAT (D スコア) の平均値で 2 分割し (各平均値 自尊心尺度 =2.333 ; 自尊心 IAT=.565)、それぞれを組み合わせ以下分散分析の独立変数を構成した。自尊心尺度高群かつ自尊心 IAT 高群 (以下、顕高潜高群と記す)、自尊心尺度高群かつ自尊心 IAT 低群 (以下、顕高潜低群と記す)、自尊心尺度低群かつ自尊心 IAT 高群 (以下、顕低潜高群と記す)、自尊心尺度低群かつ自尊心 IAT 低群 (以下、顕低潜低群と記す) の 4 群を構成した。

3. いじめ認知における顕在的・潜在的自尊心の影響

(1) いじめ対象者への印象

A 子と B 子に関する印象についてそれぞれに因子分析を行ったが、因子構造が異なり共通な因子を抽出することができなかった。そこで、印象の評定項目ごとに平均値と標準偏差を算出し、これを基にいじめの種類 2 (加害者 A 子、被害者 B 子) × 自尊心 4 (顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群) の 2 要因分散分析を行った。前者は参加者内要因、後者は参加者間要因である。平均値と標準偏差は Table 2 に示した。

分析の結果、「反抗的だ」「冷酷だ」「感情的だ」「劣等感が強い」「感じ悪い」「自己主張が強い」「攻撃的だ」「自己中心的だ」「被害妄想的な」「理屈っぽい」については、いじめの種類の主効果のみが確認され (順に、

$F(1,67)=96.72$; $F(1,66)=51.42$; $F(1,67)=171.25$; $F(1,66)=188.11$; $F(1,67)=137.39$; $F(1,67)=74.79$; $F(1,67)=152.93$; $F(1,67)=117.25$; $F(1,67)=75.35$; $F(1,67)=12.01$, いずれも $p<.001$)、A 子のほうが B 子よりいじめの項目についても値が高く、いじめ加害者は被害者よりネガティブな印象がもたれることが示された。「嫌い」については、いじめの種類の主効果 ($F(1,66)=75.14, p<.001$) が有意となり、A 子のほうが B 子より嫌われていた。また交互作用が有意傾向 ($F(3,66)=2.29, p<.1$) を示し、必要な下位検定と多重比較 (Tukey HSD) を行ったところ、顕高潜高群のほうが顕低潜低群より A 子を嫌う傾向が示されたが ($p=.061$)、B 子についてはこのような差が見られなかった。「暗い」については、いじめの種類的主効果と交互作用が共に有意で (順に、 $F(1,67)=7.19, p<.01$; $F(3,67)=2.79, p<.05$)、必要な下位検定を行ったところ、顕高潜高群のみでいじめ種類の効果がみられ ($F(1,18)=18.24, p<.001$)、A 子のほうが B 子より暗いと知覚していた。「ルールを守らない」については、いじめの種類的主効果 ($F(1,67)=89.33, p<.001$) が有意となり、A 子のほうが B 子よりルールを守らないと考えられていた。また交互作用が有意 ($F(3,67)=4.17, p<.009$) で、必要な下位検定と多重比較 (Tukey HSD) を行ったところ、顕高潜高群および顕高潜低群が顕低潜低群より A 子に対しルールを守らないという印象を強く抱いていた。「気が弱い」「積極的だ」については特に顕著な結果はなかった。

Table2. 印象 (いじめ認知の場面想定法) の平均と (標準偏差)

	顕高潜高群 (19 人)		顕高潜低群 (14 人)		顕低潜高群 (21 人)		顕低潜低群 (17 人)	
	加害者	被害者	加害者	被害者	加害者	被害者	加害者	被害者
反抗的だ	5.37 (1.26)	2.26 (1.10)	4.57 (1.79)	1.71 (0.99)	4.52 (1.50)	2.52 (1.29)	4.65 (1.62)	2.76 (1.25)
冷酷だ	5.06 (1.11)	2.11 (1.02)	4.14 (1.35)	2.71 (1.82)	4.33 (1.43)	2.67 (1.53)	4.06 (1.64)	2.41 (1.33)
感情的だ	5.84 (1.26)	2.53 (1.39)	6.14 (0.53)	2.21 (1.25)	5.57 (1.40)	2.76 (1.37)	6.00 (1.50)	3.12 (1.11)
嫌い	5.61 (1.24)	2.28 (1.23)	5.21 (1.31)	2.21 (1.58)	5.00 (1.48)	2.95 (1.63)	4.35 (1.41)	2.88 (1.65)
劣等感が強い	6.42 (0.84)	2.32 (0.95)	6.29 (1.20)	1.93 (1.14)	5.85 (1.50)	2.30 (1.38)	5.71 (1.49)	2.76 (1.75)
感じ悪い	5.95 (0.85)	2.05 (0.97)	5.50 (1.02)	2.43 (1.60)	5.43 (1.43)	2.38 (1.20)	5.29 (1.40)	2.94 (1.92)
自己主張が強い	5.00 (1.49)	2.79 (1.44)	5.71 (1.13)	2.29 (1.38)	5.00 (1.55)	3.05 (1.50)	5.00 (1.77)	3.00 (1.25)
暗い	4.11 (1.45)	2.53 (1.31)	3.07 (1.38)	2.79 (1.67)	3.24 (1.41)	2.62 (1.16)	3.12 (1.22)	3.24 (1.64)
攻撃的だ	5.68 (0.82)	2.05 (0.97)	5.79 (1.18)	1.79 (1.25)	4.95 (1.83)	2.52 (1.60)	5.29 (1.21)	2.53 (1.42)
自己中心的だ	5.89 (1.05)	2.16 (1.34)	5.86 (1.03)	2.29 (1.60)	5.10 (1.64)	2.76 (1.64)	5.18 (1.55)	3.00 (1.58)
ルールを守らない	4.53 (1.02)	1.79 (0.92)	4.50 (1.51)	1.71 (1.27)	3.90 (1.58)	2.33 (1.24)	3.24 (0.90)	2.23 (1.20)
被害妄想的な	4.89 (1.49)	2.32 (1.45)	5.21 (1.67)	2.00 (1.41)	4.81 (1.72)	3.05 (1.50)	4.76 (1.15)	3.12 (1.73)
理屈っぽい	3.58 (1.61)	2.52 (1.31)	3.36 (1.95)	1.93 (1.49)	3.90 (1.76)	2.67 (1.43)	3.29 (1.53)	3.00 (1.41)

(2) いじめ対象者への感情

A子とB子に対する感情についてそれぞれに因子分析を行ったが、上述した印象と同様、因子構造から共通な因子を抽出することができなかった。そこで、感情の評定項目ごとに平均値と標準偏差を算出し、これを基にいじめの種類2（加害者A子、被害者B子）×自尊心4（顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群）の二要因分散分析を行った。印象と同様、前者は参加者内要因、後者は参加者間要因である。平均値と標準偏差はTable 3に示した。

分析の結果、「むなしい」「憎らしい」「すっとした」「どうでもいい」「イライラした」「自信がない」「情けない」については、いじめの種類の主効果のみが確認され（順に、 $F(1,67)=7.16, p<.01$ ； $F(1,67)=32.73, p<.001$ ； $F(1,67)=12.70, p<.001$ ； $F(1,67)=6.39, p<.05$ ； $F(1,67)=36.76, p<.001$ ； $F(1,67)=46.33, p<.001$ ； $F(1,67)=45.38, p<.001$ ；）、A子のほうがB子よりいずれの項目についても値が高く、いじめ加害者は被害者よりネガティブな感情が抱かれることが示された。「悲しい」についてもいじめの種類の主効果のみ確認されたが（ $F(1,67)=9.29, p<.01$ ）、ここではB子のほうがA子より悲しいという感情を持たれていた。また「不安な」と「つらい」についてはいじめの種類の主効果に有意傾向がみられたが（ $F(1,67)=2.79$ ； $F(1,67)=3.37, p<.1$ ）、ここでもB子のほうがA子より不安が高くつらい気持ちをもってると評価される傾向が示された。「動揺した」ではいじめの種類的主効果（ $F(1,66)=23.56, p<.001$ ）がみられ、B子のほうがA子より動揺していると感じられていた。また自尊心の主効果に有意傾向がみられ（ $F(3,66)=2.45, p<.1$ ）、多重比較（Tukey

HSD）を行ったところ、顕低潜低群のほうが顕低潜高群よりA子B子にかかわらずいじめ対象者に動揺していると感じていた。「疲れた」「ばからしい」「ぞくぞくした」「孤独な」については、特に顕著な結果は得られなかった。

4. いじめ経験における顕在的・潜在的自尊心の影響

いじめ経験（いじめ経験の有無およびいじめられ経験の有無）の度数について、自尊心4群（顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群）で、差が有るかどうかを確認するために χ^2 検定を行ったところ、いじめ経験、いじめられ経験いずれについても人数比率の偏りは有意ではなかった（順に、いじめ経験（加害） $\chi^2(3)=5.28$ ；いじめられ経験（被害） $\chi^2(3)=3.31$ 、いずれもn.s.）。

次に、いじめ経験（いじめ経験・いじめられ経験）の組み合わせを考慮し、いじめ経験およびいじめられ経験両方あり（以下、両経験群と記す）、いじめ経験のみ（以下、加害群と記す）、いじめられ経験のみ（以下、被害群と記す）、いじめ経験およびいじめられ経験両方なし（以下、経験なし群）の4群を設定した。この4群で顕在的自尊心および潜在的自尊心に差が有るかどうかを検討するために、いじめ経験4群を独立変数、2つの自尊心を各々従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、顕在的自尊心である自尊心尺度の平均値は $F(3,67)=1.33, n.s.$ で、いじめ経験4群間で有意な差は検出されなかった。

また、潜在的自尊心である自尊心IATのDスコアも $F(3,64)=1.93, n.s.$ で、有意な差はみられなかった。ただし、自尊心（顕在的自尊心の高群・低群および潜

Table3. 感情（いじめ認知の場面想定法）の平均と（標準偏差）

	顕高潜高群		顕高潜低群		顕低潜高群		顕低潜低群	
	加害者	被害者	加害者	被害者	加害者	被害者	加害者	被害者
むなしい	4.89 (0.99)	4.94 (1.99)	5.86 (1.17)	4.50 (1.65)	5.33 (1.39)	4.95 (1.53)	5.29 (1.16)	4.65 (1.58)
不安な	5.63 (1.38)	6.00 (0.94)	6.21 (1.19)	6.29 (1.20)	5.43 (1.29)	5.86 (1.71)	5.29 (1.57)	5.76 (1.64)
憎らしい	5.63 (1.12)	4.47 (1.22)	5.29 (1.64)	4.79 (1.63)	5.62 (0.97)	4.38 (1.66)	5.82 (1.19)	4.06 (1.35)
動揺した	4.58 (1.57)	5.58 (1.22)	4.57 (2.03)	6.07 (0.83)	4.20 (1.58)	5.40 (1.14)	5.24 (0.97)	6.00 (1.06)
すっとした	3.68 (1.57)	2.53 (1.58)	3.00 (1.71)	2.36 (1.55)	2.52 (1.44)	2.43 (1.72)	3.88 (1.41)	2.24 (1.09)
つらい	5.79 (1.23)	6.11 (1.15)	6.07 (0.83)	6.07 (1.39)	5.76 (0.89)	6.10 (1.37)	5.59 (1.28)	6.29 (0.85)
どうでもいい	3.79 (1.96)	3.32 (1.80)	3.36 (2.24)	2.71 (1.54)	3.19 (1.43)	2.90 (1.41)	3.47 (1.81)	2.29 (0.92)
イライラした	5.68 (1.16)	4.11 (1.56)	5.64 (0.93)	4.36 (1.86)	5.95 (0.80)	4.76 (1.48)	5.82 (1.19)	4.53 (1.28)
自信がない	5.58 (1.57)	3.37 (1.46)	5.71 (1.33)	4.21 (1.88)	5.57 (1.47)	4.29 (1.84)	6.06 (1.03)	3.71 (1.76)
情けない	4.79 (1.44)	3.79 (1.75)	5.29 (1.27)	3.07 (1.49)	5.05 (1.63)	3.48 (1.47)	5.24 (1.30)	3.88 (1.50)
悲しい	5.16 (1.34)	6.00 (1.33)	5.29 (1.14)	5.79 (1.63)	5.43 (1.47)	6.05 (1.32)	5.47 (1.33)	6.12 (1.11)

在的自尊心の高群・低群)について、いじめ経験で差が有るかどうかを確認するために χ^2 検定を行った。ただし、加害群は合計6人で、顕在的自尊心2群に分割した期待度数は顕在的自尊心高群2人(期待度数2.8)、低群4人(期待度数3.2)だったので分析から除外し、両経験群・被害群・経験なし群の3群で検討した。その結果、人数比率の偏りが有意傾向($\chi^2(2) = 5.49, p < .1$)を示したので、残差分析を行ったところ、両経験群では顕在的自尊心低群者が有意に多く(両経験群:高群6人(調整済み残差-2.1)、低群15人(2.1))、逆に経験なし群では顕在的自尊心高群者が有意に多かった(経験なし群:高群18人(2.1)、低群11人(-2.1))。また、潜在的自尊心2群に分割した加害群の期待度数は潜在的自尊心高群3人(期待度数3.4)、低群3人(期待度数2.6)だったので分析から除外し、上記同様3群で検討したが、人数比率の偏りについては特に顕著な結果はえられなかった($\chi^2(2)$

= 0.11, n.s.)。

5. いじめ影響尺度における顕在的・潜在的自尊心の影響

いじめ影響尺度の3下位尺度の平均値を従属変数、自尊心4(顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群)を独立変数として一要因分散分析を行った。平均値と標準偏差はTable7に示した。その結果、「他者過敏」で自尊心の主効果がみられ($F(3,61) = 6.05, p < .001$)、多重比較(Tukey HSD)を行ったところ、顕低潜低群および顕低潜高群のほうが顕高潜高群よりいじめを経験後他者に過敏になっていた(いずれも $p < .01$)。また顕低潜低群および顕低潜高群のほうが顕高潜低群よりいじめを経験後他者に過敏になる傾向が示された($p < .1$)。ただし、「成長」および「情緒的不適応」については特に顕著な結果はえられなかった。

Table4. いじめ加害経験の顕在的・潜在的自尊心群別の人数分布と(調整済み残差)

	顕高潜高群	顕高潜低群	顕低潜高群	顕低潜低群
いじめ経験(加害)あり	4 (-1.8)	4 (-.8)	11 (1.6)	8 (.9)
いじめ経験(加害)なし	15 (1.8)	10 (.8)	10 (-1.6)	9 (-.9)

Table5. いじめ被害経験の顕在的・潜在的自尊心群別の人数分布と(調整済み残差)

	顕高潜高群	顕高潜低群	顕低潜高群	顕低潜低群
いじめられ経験(被害)あり	7 (-1.4)	6 (-.7)	13 (1.2)	10 (.8)
いじめられ経験(被害)なし	12 (1.4)	8 (.7)	8 (-1.2)	7 (-.8)

Table6. 顕在的自尊心と潜在的自尊心のいじめ体験別平均と(標準偏差)

	両経験群(21人)	加害群(6人)	被害群(15人)	経験なし群(29人)
顕在的自尊心	2.16 (0.53)	2.15 (0.57)	2.43 (0.72)	2.45 (0.52)
潜在的自尊心(Dスコア)	0.68 (0.24)	0.33 (0.63)	0.49 (0.34)	0.57 (0.33)

Table7. いじめ影響の顕在的・潜在的自尊心群別の平均と(標準偏差)

	顕高潜高群	顕高潜低群	顕低潜高群	顕低潜低群
他者過敏	4.29 (1.18)	4.43 (1.03)	5.43 (0.89)	5.45 (0.93)
成長	5.42 (0.78)	5.61 (0.85)	5.07 (1.47)	4.79 (0.85)
情緒的不適応	2.19 (1.28)	3.09 (1.81)	3.36 (1.53)	2.91 (1.62)

考察

本研究は、いじめ想定場面の提示に拠るいじめ認知、実際のいじめ経験およびいじめの影響について、顕在的・潜在的自尊心の影響を明らかにすることであった。

まず、場面想定法を用いたいじめ認知の検討のうちいじめ対象者への印象については、いじめ加害者（A子）は被害者（B子）より、攻撃的・反抗的・冷酷・感情的・被害妄想的で、理屈っぽく劣等感や自己主張が強いうえに自己中心的で感じが悪いという印象が持たれ、かつ嫌われていた。これらのことから、いじめ加害者は被害者より一般的にネガティブでかつ問題の多い性格をもつという印象が抱かれることが明らかになった。また、本研究の主目的である自尊心の影響については、顕高潜高群のほうが顕低潜低群より加害者を「嫌う」傾向が示されたが、被害者には顕在的・潜在的自尊心の差はみられなかった。次に、顕高潜高群のみで加害者のほうが被害者より「暗い」という印象を抱いていた。さらに、加害者のほうが被害者よりルールを守らないと考えられていたが、特に加害者に対して顕高潜高群および顕高潜低群が顕低潜低群よりルールを守らないという印象を強く抱いていた。以上のことから特に顕高潜高群はいじめ加害者に対してよりネガティブかつ厳しい反応をすることが示された。顕高潜高群は肯定的な自己感情や自己受容が高く、それが安定しているため、自己の価値観や信念に対しても自信を持っており、「いじめる」という反社会的行動に対して自らの価値観や信念と対極にあることを敏感に察知し、より加害者をネガティブかつ反社会的と判断するのかもしれない。

また、同様にいじめ対象者への感情については、いじめ加害者は被害者より「憎らしい」、「イライラした」、「自信が無い」や「情けない」というネガティブ感情が持たれると同時に、「むなしい」や「どうでもいい」という虚無的な感情も抱かれることが示された。ただし、「すっとした」のようにいじめ加害者に同一視してうっぶんを晴らそうとする気分もあるという問題も明らかになった。その一方で、被害者のほうが「悲しく」、「不安」で「つらい」などいじめ被害者への共感も示された。また、本研究の主目的である自尊心の影響については「動揺した」のみで確認され、顕低潜低群のほうが顕低潜高群より加害者・被害者にかかわら

ずいじめ対象者は動揺していると感じていた。顕在的自尊心は具体的なポジティブ経験に基づく自己肯定感であり、一方潜在的自尊心は肯定的自己感情との非意図的な連合の強さを表している。そのため、顕低潜高群は具体的な成功や他者からの受容経験は希薄であるものの非意識的・自動的自己肯定感情は高く、それを背景に他者軽視傾向も高い（小塩ら, 2009）ことから、いじめ場面に遭遇しても動揺は少ない。しかし、顕低潜低群は否定的な自己感情や自己不信・不安が固定化しているため、他者への警戒心が強くかつ他者からの脅威に敏感なため、加害・被害にかかわりなくいじめという対人関係のネガティブ現象に出会うとより強く動揺すると考えられた。

次に実際のいじめ経験について検討したところ、顕在的・潜在的自尊心の組み合わせの4群間（顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群）で、いじめ経験・いじめられ経験の有無についての人数分布の偏りはいずれもなかった。また、いじめ経験4群（両経験群、加害群、被害群、経験なし群）において、顕在的自尊心（自尊心尺度の平均値）および潜在的自尊心（自尊心IATのDスコア）の差はいずれも検出できなかった。ただし、加害群は人数が少なすぎるために除外して両経験群・被害群・経験なし群の3群について、顕在的自尊心高群・低群の人数分布の偏りを検討すると、両経験群では顕在的自尊心低群が高群より人数が多く、逆に経験なし群では顕在的自尊心高群が低群より人数が多かった。前者の結果は、加害・被害両方経験者の自尊心（顕在的）が低かったとする本間（2003）や吉川（2012）の結果と整合的であり、後者の結果は、仮想的有能感が低く自尊感情が高い自尊型がいじめ加害・被害ともに少ないとする松本ら（2009）の結果と整合的であった。当初、いじめ加害・被害両経験群で顕在的自尊心が低いのは、いじめ被害を受けたことで脆弱な顕在的自尊心が低下したが、潜在的自尊心は案外高くストレス緩和などのために他者を軽視する傾向からいじめを行うと予想した。このことは、実証できなかったが、統計上有意ではなかったものの両経験群のDスコア値が最も高く、かつ両経験群のうち顕低潜高群の度数が最も高かった（両経験群全21人中顕低潜高群は9人；顕高潜高群3人；顕高潜低群3人；顕低潜低群6人）。小塩ら（2009）は、顕低潜高群が最も他者軽視傾向が強まることを報告して

いるが、これがいじめ加害・被害両方を経験することにつながっているのかもしれない。ただし、両経験群・被害群・経験なし群の3群において潜在的自尊心高低間ではこのような人数比率の偏りはみられなかったことから、その傍証は得られていない。

さらに、いじめの影響については「他者過敏」「成長」「情緒不適応」の3つの下位因子に分かれることが示され、それらが顕在的・潜在的自尊心の組み合わせ4群で差が有るかどうか検討したところ、「他者過敏」のみで差が確認され、顕低潜低群および顕低潜高群のほうが顕高潜高群より高値を示し、顕在的自尊心の低い者は、顕在的・潜在的自尊心高群よりも、いじめを経験すると他者に過敏に反応するようになっていた。このことは、顕高潜高群は自らのポジティブ体験により安定した自尊心をもつが、顕在的自尊心が低い者はこれまで具体的な成功や他者受容などポジティブ体験が少ないためにいじめに遭遇すると、これ以上他者から拒絶されることが無いように、あるいはいじめの標的になるのを避けようとより強く動機づけられるため、他者に同調したり他者からの評価に過敏に反応するようになるのかもしれない。その中でも顕在的自尊心が低く潜在的自尊心が高い群は、心の中では他者を軽視しつつも、表面上は自分がいじめられないように他者に同調してやり過ぎそうとしたり、他者にどのように思われているかを過剰に気にするようになるのかもしれない。なお、本研究では「成長」と「情緒的不適応」については特に顕著な結果はえられなかった。

さて、最後に本研究の課題について触れておきたい。第1に、顕在的自尊心と潜在的自尊心のいじめに対する関連性を詳細に分析するなら、両者の組み合わせ(顕高潜高群、顕高潜低群、顕低潜高群、顕低潜低群)といじめ経験(両経験群・被害群・加害群・経験なし群)をクロス集計したうえで分析すべきである。しかし、本調査では参加人数が十分ではなかったために、このような分析ができず、予想を十分に検証できなかった。第2に、本調査では潜在的自尊心測定のため自尊心IATを実施したが、この調査は時間と場所の制約を受けるため女子大学生を対象として調査を実施するという遡及的研究になり、実際にいじめ件数が最も多い中学生を対象にした場合は発達の要素や環境要因とも相まって別の視点からの示唆が得られる可能性がある。第3に、いじめ認知では場面想定法を行ったが、自尊

心の影響については多くの結果を得られなかった。これについては、実際にいじめ認知に自尊心の影響が少ないのか、今回実施した場面想定刺激文の妥当性が低いのかなどその原因は明らかではない。刺激文の妥当性を検証しておく必要があり、かつ複数の刺激文で同様の結果が得られるかどうか検討すべきであった。第4に、本研究では顕在的自尊心測定を選択肢がポジティブ側に偏ったものであったために、その他の研究との整合性に疑問が生じた可能性は否定しきれない。これらの点については、今後より精緻な研究が望まれる。

本研究では、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い者は、脆弱な自尊心のポジティブさを維持継続するためにいじめという行為を通じて他者より優位に立つことで自らの自尊心を防衛している、あるいは顕在的自尊心が低く潜在的自尊心が高い者は他者軽視傾向が強く(小塩ら, 2009)、自らのストレス発散のために他者をいたぶる行為を行うなど、顕在的自尊心と潜在的自尊心のギャップを埋める防衛的手段としていじめを行っていることを想定した。具体的に得られた結果は、それらを検証するには至らなかったが、部分的にその傍証になるものも検出できた。これらのことから、いじめ現象を明らかにしていくためには顕在的自尊心のみならず潜在的自尊心も併せて考慮することが肝要であると考えられた。特に、その不一致から引き起こされる自己防衛がいじめを生み出すメカニズムの解明は意義のあることと思われる。

引用文献

- Banaji, M.R. & Greenwald, A.G. 2013 *Blindspot: Hidden Biases of Good People* 出版社(北村英哉・小林 知博訳 2016 心の中のブラインドスポット～善良な人々に潜む非意識のバイアス 北大路書房)
- Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J.M. 1996 Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review* 103 5-38.
- Batson, C.D., Bolen, M.H., Cross, J.A., & Neuringer-Benefiel, H.E. 1986 Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of Personality*

- and *Social Psychology*, 50, 212-220.
- Cammack-Barry, T. 2005 Long term impact of elementary school bullying victimization on adolescent *Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering*, 65(9-B), 4819.
- Cutrona, C.E. 1982 Transitions to college : Loneliness and the process of social adjustment. In L. A. Peplau & D. Perman (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory research and therapy* pp291-309 New York Wiley
- Crocker, C.R., & Wolfe, C. T., 2001 Contingencies of self-worth. *Psychological Review* 108 593-623.
- 藤井 勉, 澤海 崇文, 相川 充 2014 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛 : 一自己愛の3下位尺度との関連から— 感情心理学研究 21 (3), 162-168.
- Greenwald, A.G., & Banaji, M.R. 1995 Implicit social cognition: Attitude, self-esteem and stereotype. *Psychological Review* 102 4-27.
- Greenwald, A.G., Nosek, B.A., & Banaji, M.R. 2003 Understanding and using the implicit association test: I. an improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.
- Guarini, A., Passini, S., Melotti, G., Brighi, A., 2012 Risk and protective factors on perpetration of bullying and cyberbullying. *Studia Educacyjne*, 23, Poznan, 33-55.
- 原島 雅之, 小口 孝司 2007 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究 47 (1), 69-77.
- 速水 敏彦, 木野 和代, 高木 邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 51, 1-8.
- 本間 友巳 2003 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究 51 (4), 390-400.
- 石田 靖彦, 中村 友一 2013 中学生のいじめ体験に関する研究 : いじめの立場における心理的特徴 愛知教育大学教育創造開発機構紀要 (3), 123-130.
- Jordan, C. H., Spencer, S.J., Zanna, M.P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. 2003 Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, Vol5 969-978.
- 香取 早苗 1999 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究 32 No.1 1-13.
- 勝間 理沙, 津田 麻美, 山崎 勝之 2011 学校におけるいじめ予防を目的としたユニバーサル予防教育 : 教育目標の構成とそのエビデンス 鳴門教育大学研究紀要 26, 171-185.
- 蔵永 瞳, 片山 香, 樋口 匡貴, 深田 博己 2008 いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響 広島大学心理学研究 (8), 41-51.
- 松本 麻友子, 山本 将士, 速水 敏彦 2009 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究 57 (4), 432-441.
- 三島 浩路 2008 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から— 実験社会心理学研究 47 (2), 91-104.
- 文部科学省 平成 27 年 11 月 4 日 [平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査等結果の訂正について]
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/11/1364257.htm (2016 年 9 月 11 日閲覧)
- 大久保 純一郎 2011 回顧的に報告されたいじめ体性の関連性 (1) 対人恐怖心性、自尊感情、ストレス反応について 同志社大学教職課程年報 (1), 57-66.
- 大西 彩子, 黒川 雅幸, 吉田 俊和 2009 児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響 : ~ 学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して ~ 教育心理学研究 57 (3), 324-335.
- 大西 彩子, 吉田 俊和 2010 いじめの個人内生起メカニズム - 集団規範の影響に着目して - 実験社会心理学研究 49 (2), 111-121.
- 小塩 真司, 西野 拓朗, 速水 敏彦 2009 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究 17 (3), 250-260.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 坂西 友秀 1995 いじめが被害者に及ぼす長期的な

影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差
社会心理学研究 11 (2), 105-115.

下田 芳幸 2014 日本の小中学生を対象としたいじめ
に関する心理学的研究の動向 教育実践研究：富山
大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 (8),
23-37.

鈴木 康平, 田口 広明, 田口 恵子 1995 いじめにか
かわる集団の特性の認知 熊本大学教育学部紀要・
人文科学 44, 273-279.

内田知宏・上埜高志 2010 Rosennberg 自尊心尺度
の信頼性およびだとうせいの検討～Mimura
&Griffiths 訳の日本語版を用いて～ 東北大学大学
院教育学研究科年報 58 第2号 257-266.

吉川 延代, 今野 義孝, 会沢 信彦 2013 いじめの被
害 - 加害体験と自尊感情との関係：大学生を対象に
した遡及的調査研究 人間科学研究 34, 169-182.

(資料 1)

《いじめ認知の刺激文》

A 子と B 子は、5 人グループの中でも仲が良かった。
2 人とも成績は中くらいで、クラスでも目立つ方では
なく、いわゆる普通の生徒だった。中 2 になったある
日、B 子は親から進路について尋ねられ、自分の将来
を考えたときもう少し頑張って勉強した方がよいと考
えるようになり、進学塾へ通い始めた。A 子も B 子
に誘われて、一緒に進学塾へ行くようになった。

塾へ行き始めた当初、2 人の成績には大きな変化は
なかった。しかし、3 ヶ月たつと B 子の成績は徐々に
向上しはじめ、B 子はさらにやる気を出して、生き生
きと頑張るようになった。それに対して A 子は、B
子と同じ塾で頑張っていたのだが、成績は伸び悩み、
B 子との差を意識するあまり、ますますやる気を失っ
てついには進学塾をやめてしまった。

A 子が進学塾をやめた後も、A 子と B 子を含む 5
人グループは、相変わらず学校では共に行動していた。
しかし、A 子と B 子の成績の差は次第に明らかになり、
A 子は B 子にとっても追いつけなくなるにつれて、2 人
の関係が変化し始めた。例えば、B 子が 5 人グループ
の話題の中心で話しているのに突然 A 子が話題を変
えてしまったり、グループでどこかに遊びに行く計画
を立てるときに、A 子は B 子がいけない日をわざと
その遊びの日程を入れたりした。そういうことが続い

て A 子と B 子の関係がぎくしゃくし始めた。しだいに、
A 子の「B 子はずし」は露骨になり、現在では B 子
はこのグループに居づらい雰囲気、悩み始めている。

